

鳥種別生態と防除の概要：カラス

※鳥獣害研究室作成（吉田担当）

※Ver. 1.0（2001年8月6日）

※Ver. 3.1（2002年3月11日）－文献情報を分け、防除策記載追加修正

※Ver. 3.5（2009年9月3日）－統計資料の更新、一部記述の修正

※無断複写・転載をお断りします。研修資料等としてご利用の場合にはご一報ください。公刊資料ではないため、引用はできません。

1 カラス類の一般的特徴

（1）分類・形態・分布

スズメ目カラス科。

一般的に「カラス」と呼ばれるのは、ハシブトガラスとハシボソガラスの2種。他に九州から北陸を中心にミヤマガラスが冬鳥として渡来。

ハシブトガラス

・学名 *Corvus macrorhynchos*

・英名 Jungle Crow

全長約 56cm, 体重 700g 前後。全身黒色で、嘴は太く、上嘴は大きく湾曲している。額の羽毛は盛り上がり、丸みがある。「アー アー」「カア カア」など澄んだ声で鳴くが、濁った声も出し、変化に富んでいる。東南アジアに分布し、日本では留鳥として全国に生息する。

ハシボソガラス

・学名 *Corvus corone*

・英名 Carrion Crow

全長約 50cm, 体重 500g 前後。全身黒色で、嘴はハシブトガラスより細く、湾曲は少ない。額はなだらか。「ガアア ガアア」と濁った声を出す。ユーラシア大陸に広く分布し、日本では留鳥として全国に生息するが、沖縄ではまれな冬鳥。



写真1. 水田で昆虫や小動物を探すハシボソガラス
2006年5月 茨城県 吉田撮影

ミヤマガラス

・学名 *Corvus frugilegus*

・英名 Rook

全長約 47cm, 体重 400g 前後。全身黒色で、嘴は細く尖っている。成鳥では嘴の基部が灰白色が目立つが、幼鳥では黒い。ハシボソガラスに似た濁った声で鳴く。群れる性質が強く、昼間でも大群で行動することが多い。ユーラシア大陸の中緯度地方に分布する。大陸から冬鳥として九州から北陸に渡来する。

（2）生息環境

市街地、農耕地、林、河原、海岸、山地など、いたるところにいる。ハシブトガラスは市街地や林を好み、ハシボソガラスとミヤマガラスは農耕地など開けた環境を好む傾向がある。

（3）餌

雑食性で、残飯や動物の死体など何でも食べる。昆虫や種子もよく食べ、果実、鳥の卵、雛なども食べる。冬には稲の落ちモミを多く食べている。ハシブトガラスはハシボソガラスに比べて動物質の餌を好む傾向がある。見つけた食物をその場で食べず、木の枝のあいだや建物のすきまなどにたくわえて、

あとで取り出して食べるという貯食行動をする。

(5) 繁殖

3月から7月に樹上や高圧線の鉄塔に木の枝や針金で巣を作り、3～5個の卵を産む。抱卵は雌だけがいき、卵は20日前後でふ化し、雌雄で雛に餌を与えて約35日ほどで巣立つ。巣立ち後も50～100日ぐらい家族で行動する。ミヤマガラスは日本では繁殖しない。

(6) 社会生活

一夫一妻。つがいは直径数百mのなわばりを持ち、非積雪地では一年中なわばりを維持する。群れはなわばりを持ってない個体で構成されるが、よい餌場ではなわばり個体が一時的に群れに参加する場合もあるようだ。独り立ちしたヒナが加わる7月頃から群れが目立つようになり、春先まで群れの多い状態が続く。秋から冬には松林などに数百羽から数千羽に達するねぐらをつくって眠る。ねぐらに集まる個体は10km程度の範囲から飛来する。ねぐらにはハシブトガラス、ハシボソガラスの両種が含まれる場合が多く、ミヤマガラスも越冬域では混じることが多い。

(7) 人との関わり

鳥獣による送電線事故の原因はカラスが多い。カラスは営巣場所として高圧線の鉄塔を好み、集めた巣材が絶縁部分をまたいでショートさせてしまうため。また庭や公園などの身近な場所に営巣した場合、特にハシブトガラスは雛を守ろうとして通りかかった人を攻撃することがある。

繁華街や住宅地では、ゴミ置き場のゴミを食い散らかすカラスが問題になっている。カラスにとっては生ゴミは絶好の餌である。カラスによる線路置き石事件は、人が撒き与えたパンを線路内の石の下に貯える行動が原因であったことがわかり、パンを与えるのをやめると置き石はなくなった。

カラスは、航空機との衝突事故を起こす鳥の上位10位以内に入り、大形の鳥であることから、エンジンに吸い込まれた場合には墜落事故につながる可能性があり危険である。

鳥の中でもいわゆる「賢い」鳥で、道路にクルミを置いて走ってくる自動車に轆かせて割るといった知恵を見せることが知られている。

(8) 狩猟・有害鳥獣駆除

3種とも狩猟鳥に指定されている。2006(平成18)年度には狩猟により合計5万2千羽、有害鳥獣駆除により合計30万1千羽が捕獲されている。近年の捕獲数は漸減傾向である(図1)。

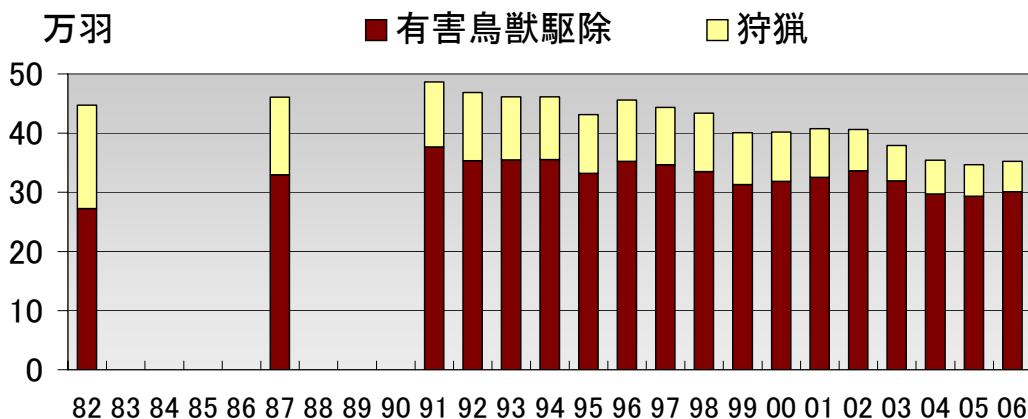


図1 カラス類の捕獲羽数 (環境省自然環境局統計より作成)

2 被害の特徴

カラスによる被害量は有害鳥類の中で最も多い(図2)。被害量は年間 4 万トン前後で、おおむね横ばいである(図3)。面積では水稲への被害が多く報告されているが、被害量では飼料作物、果樹、野菜への被害が多く、水稲は少ない(図4)。

ビニルハウスを破る、子牛を襲うといった被害を含め、加害対象や加害内容が他の有害鳥類に比べ非常に多岐にわたる点がカラス類の特徴である。

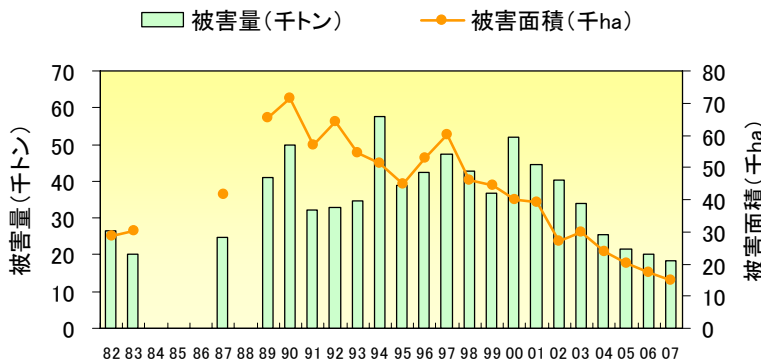


図3 カラスによる農作物被害量と被害面積

農林水産省統計より作成

各種穀類の中ではトウモロコシを特に好むため、トウモロコシの播種期には、出芽当日から出芽後 10 日頃まで、苗が引き抜かれて種子部分が食べられる被害が多く発生する。それ以降も苗が十分に根を張るまでの間は引き抜くだけの被害が起こる。登熟期には外皮を破って子実を食害する(写真 2)。登熟期の被害では、畑の周辺部分が被害を受けやすい。

野菜ではトマト、スイカなど果菜類への被害が多い。キャベツやパレイショ等も食害される。

北海道ではロールパックサイレージのラップフィルムが破られる被害が最も多く、果樹、デントコーン、テンサイへの被害がそれに次ぐ。

3 防除策

(1) 防鳥網

果樹の被害や家畜飼料の盗食などに対しては、防鳥網を張ってカラスが侵入できないようにするのが確実である。網目は 75mm 以下のものを使用する。

自家菜園などの小規模な畑では、被害発生前に防鳥網を張るとよい。完璧な張り方でなくても食害を受けにくくする効果はあるので(写真3)、頻繁に目をかけられる自家菜園などでは、手間のかからない張り方をし、それでも被害が見られた場合により堅固な張り方にするのがよいだろう。

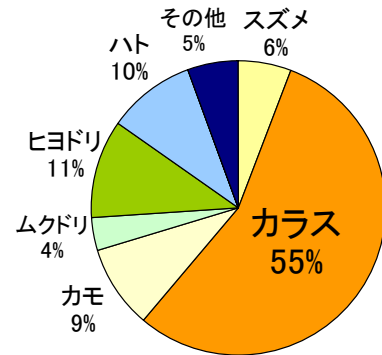


図2 加害鳥種別の被害量(重さ)

農林水産省統計より作成(平成 19 年度)

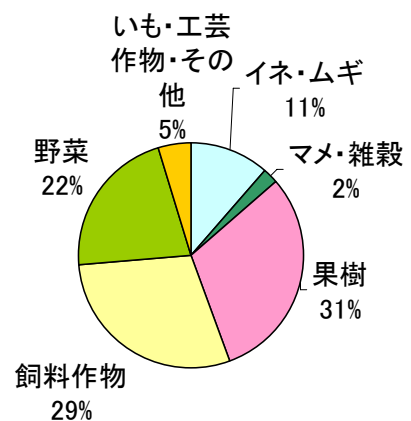


図4 カラスによる農作物被害量(重さ)

農林水産省統計より作成(平成 19 年度)



写真2. カラスに食害された飼料用トウモロコシ

カラスは外皮を先端部から引き剥がして食害する。中央部からついて食害することもある。

(2001/8/23 茨城県 藤岡撮影)

(2) 耕種的対策

播種期のトウモロコシでは、深播により被害を軽減することができる。3cm 強の普通播にくらべ、5~6cm の深播では、苗の生存率、被害株の再生割合とも好結果が得られ、生育の遅れもほとんどないと報告されている。ローラーによる鎮圧との組み合わせでさらに効果が向上するという。しかし、重粘土土壌においては、播種深度が深すぎたり鎮圧をかけすぎると出芽率が低下するので一律には適用できない。

登熟期のトウモロコシでは、畑の周辺部が加害されやすく、また粗植の場合に加害されやすい。なるべく正方形に近い形状で大面積に作付けることで被害率を小さくすることができる。

(3) 忌避剤

トウモロコシ種子に粉衣する忌避剤がある(キヒゲンR-2フロアブルとキヒゲンディーフロアブル)。しかし絶対的な忌避効果ではないため、周辺に他の餌が少なければ加害を受ける。

(3) テグス

カラスの翼開長(翼を広げたときの端から端までの長さ)は1m 前後なので、テグスが羽ばたきの邪魔になるように、おおむね1~2m 間隔で高さ1m 程度以上に張り巡らせばかなり有効と考えられる。歩いて侵入されないように側面は網にしたほうがよい。果樹園などでは、カラスの侵入経路となる高木や建物から見たときにテグスが密になるように張る。収穫期のトウモロコシでは、穂の頂部かやや上側の高さにテグスを張るとよい。ただし、テグスは絶対的な遮断ではないので、カラスにとって魅力の大きい作物を栽培していたり、周辺に他の餌が少ない場合には侵入されてしまう。

カラスがビニルハウスを破く場合には、カラスが止まる位置に、ちょうど邪魔になるようなカラスの胸くらいの高さ(15cm 前後)に針金やテグスを張る。

(4) その他の方法

かかしや爆音機のほか、さまざまな防鳥機器、カラスの死体をつるすなどの方法は、一時的には効果があるが、日数の経過とともに慣れを生じる。これらの追い払い道具は、設置位置や組み合わせを頻繁に変えて、カラスの警戒心を呼び起こすように工夫して使う。空港での例では、ディストレスコール(捕食者に捕まったときの悲鳴)を流して集まってきたカラスの一部を銃で駆除すると、相当長期間にわたってディストレスコールを流すだけで追い払うことができたという。

各地でカラス捕獲小屋を用いた捕獲が行われた例がある。カラスの捕獲には、有害鳥獣駆除あるいは狩猟の手続きにより、捕獲許可をとる必要がある。捕獲効率は野外の餌が少ない冬に高く、捕獲される個体も経験の浅い若鳥が多い。また、カラスは移動能力が高いため、一地域で捕獲しても周辺から次々に侵入してきて結局個体数はあまり減少しない。銃器による駆除では、その場所が危険だとカラスに学習させる効果も期待できるが、捕獲小屋ではそのような効果はないので、捕獲小屋による被害対策を考えていく場合には、捕獲によってカラスの個体数や農作物への被害が減ったかどうかのモニタリング体制と費用対効果の検討が必要であろう。

4 参考文献

環境省自然環境局(2001) 自治体担当者のためのカラス対策マニュアル。

吉田保志子(2006) カラスの生態と被害対策について。農業技術 61(10):445-449。



写真3. 防鳥網をかけた自家菜園のスイートコーン

支柱なしで網を作物にかぶせてあるだけだが、茎や果実に止まりにくいため、カラスの食害を受けにくくなる。

(2003/6/20 茨城県 吉田撮影)